かった。現在の経済の仕組みは、限りない消費の方向に進んでいる。我々はそうした方向が自分たちの居場所である地球を、自ら壊していることに気づいていない。そうした中で起きた地震だということを忘れてはならないと感じている。
福島の原発事故で子どもたちは外で元気に遊ぶこともできずにいる。なぜこうなってしまったのか。原子の世界までコントロールしようとする人間の欲が原因ではないのか。単に震災で壊れてしまったものを元通りに直すのではなく意識の変革をしなければ、食べ物すら手に入らない世界になる。この震災は1,000年前に起きていれば、自然災害だったが、現代に起きたことは人類への警鐘、文明の転換点と捉えるべきだと思う。震災が起こり、紙幣がただの紙切れになった時、我々はお金があっても幸せではないことに気が付いた。お金を使うことだけが幸せなのか。まさに本当の豊かさとは何かと考える時だ。私にとって豊かさは全てが断絶された中でも湧いてくる自然の恵みの「お湯」、またそのお湯をくみ上げる仕組みを残してくれた先祖とのつながりが象徴している。温泉に入ることで地球とつながり、自然と共生する。我々は自然がないと生きられない。
シンプルが一番である。電気が止まっても、最低限生きていけるというよりどころは重要だし、何より地球と共存していくことが大切だ。鳴子は地球の熱エネルギーを与えられた恵まれた場所で、ポテンシャルが大きい。湯治場は身体を癒し、自分が自然の一部だということ、自然の恩恵を受けて生きていることを気づかせてくれる心身の再生の場だ。湯治場である鳴子が、人の命と地球の命が循環する場になることを願っている。

個人

南三陸町

南三陸町から新たなライフスタイルや価値観を提案していきたい。

後藤 一磨 個人

取材日 2012.09.18

地域の歴史や文化、自然が大切であるとの考えから、宮城県南三陸町の文化財保護委員や南三陸ふるさと研究会員、観光協会地域ガイドとして活動してきた。東日本大震災後、津波の教えを復興と新しいまちづくりに生かし、自然や文化を次世代へ受け継ぐために「福興市」語り部プロジェクトで自らの被災体験を語る語り部ガイドとして活動している。

震災以前の活動

私は南三陸町の文化財保護委員だ。地域の歴史と伝承が大切であると考え、「南三陸ふるさと研究会」で活動している。この研究会は、南三陸町の文化や自然などさまざま分野を題材とし、ふるさとのより良い未来を志向して、過去と現在を研究する会だ。東日本大震災以前から、津波に関する伝承はたくさんあった。例えば、南三陸町の入谷（いりや）地区には、津波によってそこまで船が入ってきたから「ふなくぼ」、津波が来たがそこで家が残ったから「残谷（のこりや）」といった地名が残されている。東日本大震災以前、話が伝わるうちに大げさになったのではないか、縄文海進の水位が高かった頃の話ではないかと思い、ふるさと研究会で津波をテーマとして大きく取り上げることはなく、そうした地名の由来の検証を行なうことはなかった。しかし、それらの伝承が確かなものであったことが、震災後に検証されている。

3月11日　14時46分

私は戸倉中学校同窓会の役員だ。あの時は卒業生の同窓会入会式を終えて、校長室でお茶を飲んでいた。翌日は卒業式だ。そろそろ帰ろうかと、玄関で校長先生や他の同窓会の役員たちと「明日は晴れるといいね」と話しながら靴を履いている時

だった。ものすごい大きな揺れが起こった。何かにつかまっていないと立っていられないほどだった。下駄箱が倒れてくるのではないか、玄関の戸のサッシが外れるのではないかと危険を感じた。揺れている時間が非常に長く、5～6分は揺れていたように感じた。「ついに宮城県沖地震が来たな。必ず津波が来るぞ」と直感した。中学校が建っている場所は海辺ではあるが、約20mの高台だ。まさかここまで津波が来るとは考えもしなかったが「生徒たちをよろしくお願いしますね」と校長先生たちに言って中学校を後にした。しかし、実際は津波が到達した。

家族と高台へ避難するため、急いで自宅へ向かった。自宅は市街地ではなく漁村地域にある。自宅まで車で走っている時、地震による被害は少ないように感じた。古い家の瓦が落ちているくらいだ。車が混雑している様子もなかった。漁民の財産である船は、引き潮で海水がなくなるところに置いておくとだめになってしまう。引き潮になる前に船を沖だし（沖合に出すこと）する必要がある。海の様子を確認しながらそれぞれが判断し、船を守りに浜へ向かう人、高台へ避難する人に行動が分かれた。

自宅に戻ると、妻と息子が棚から落ちたものなど地震でぐちゃぐちゃになった家の片づけをしていた。「お前たちそんなことしている暇はないんだぞ！」と避難を指示した。チリ地震津波とは違い、すぐ近くで起こった地震で起きる津波だ。早ければ15分で津波が来ると思った。私は背広を着ていたが、避難してからのことを考えて普段着に着替えた。着ていた背広を2階の部屋に放り出した。普段は几帳面な妻がその時はパニックになっている様子で、仏壇の位牌を抱えて逃げようとした。「津波が来るぞ！そんなものはいいから、逃げるぞ！」と言って連れ出し、急いで車で高台へ向かった。妻と息子は乗用車で、私は軽トラックに飼い犬を乗せて避難した。高台から海へ目を向けると、海水がない。昆布が残って黒くなった海底が現れていた。海水が無くなり、岩礁地帯が山のようにそびえて、砂や泥の地帯が低く平野のようになり、一番深い部分が川のようになって、今までそこにあった海水が流れ込んでいくといった光景だった。志津川湾から見える椿島が干上がったように見え、時間さえあればそこまで歩いて渡れそうな光景だ。「ああっ、また海の底が見えた！」と思った。実は、当時中学1年生だった私は、同じ高台から同じ海の光景を見ていた。昭和35年（1960年）5月24日のチリ地震による津波の経験だ。海水が無くなり、赤茶けた色の海草が残った海底の光景は今でも忘れない。チリ地震による津波の被害は、当時の自宅の床上30cmほどだった。

水平線上に白い帯がスーッと引かれて見えた。それがだんだん近づいてくる。「ああっ、来たな、自宅の2階まで海水が行くかもしれないな」と思った。チリ地震津波はゆったりした感じだったが、それとは違うように感じた。椿島が半分以上波に飲み込まれた。南三陸町は昭和35年に被災してから堤防を作った。昭和35年の津波の時は堤防が無かったので、今回はそのコンクリートの堤防が守ってくれるかと期待していた。しかし、5mほどの堤防に波が当たっても一切水しぶきを上げることもなく、波はスーッと侵入してきた。堤防よりはるかに高い波だった。波が堤防を越えると浜沿いの木造家屋をなぎ倒した。柱がへし折られバキバキと音が響いた。だいたい速度は40～50kmはあっただろう。水の壁が襲ってくる印象だった。次々に家がのみこまれ、自宅まであっという間に波が到達し、約15年前に建てた別棟は粉微塵にされてしまった。母屋は最初、水にじっと耐えているように見えた。しかし、波が軒を越えた途端ぐらっと傾き、スッと浮いて、そのままの形で西の方に押されていった。3回ほど回転して引き波にさらわれていってしまった。かやぶき屋根の自宅が、私たちの目の前を通って椿島の向こうに消えていった。チリ地震の津波の経験から、今回の津波は2階まで浸水するかもしれないと思ったが、まさか家を持っていかれるとは思わなかった。自宅が流されていくのを見るのが一番悲しかった。

波が盛り上がるようにうねり、大丈夫だろうと思っていた家までを次々とのみこみ、私たちが最初に避難した場所にまで津波が迫ってきた。避難してきた人たちが乗ってきた車が何台か駐車してあったが、人だけでも逃げなければと、より高いところへ皆で逃げた。ほんの10m動かせば助かったのに、目の前で10台ほどの車が津波にさらわれた。その後、波が引き始め、それを見て避難していない人を助けに行かなければと、高台から降りていこうとする人がいたので「だめだ！また波が来るから！」と力尽くで制止した。一番高いと

撮影：2011.3.11　南三陸町　第2波の津波が到達する直前、干上がったように見えた椿島の様子（つり船 明丸 三浦明さん撮影）

ころへ避難すると、皆集まってきた。高台へ避難したのは総勢70名ほど。同じ地域に住む顔なじみばかりだったので、避難してきていない人もすぐに分かった。しかし、その人たちの無事を皆で祈るしかなかった。
夕方になると横殴りに雪が降り出した。皆で相談して火を焚いて過ごすことになった。私が山歩きを得意なことを集落の人たちは皆知っているので、私がリーダーシップを取り若い人たちと木を集めてきて、たき火を2ヶ所に焚いた。火を囲って丸太を置き、皆で肩を寄せ合って寒さをしのいだ。子どもや高齢者は被害のなかった車の中で暖をとった。余震は収まらず、津波によって家をなぎ倒されるバキバキという音が聞こえ、「もう何波目になる？」と皆で話していた。空は真っ赤に染まっていて、気仙沼で火事が起きていることが分かった。
海を見ると航路標識の赤い点滅灯が、波が来ると岸に押し寄せ、波が引くと沖に流されていく。不安に襲われながら身を寄せ合って一晩を過ごした。毎年、津波避難訓練があるが、高台で点呼を取るだけで、非常避難袋を持つ習慣などなかった。皆、避難訓練に参加しているだけだったので、実際の避難の時は着の身着のまま逃げてきて、食料や毛布など必要な物は持ってきていなかった。誰も眠ることもできず、夜が明けた。

一変した集落と避難生活

明朝、最初に逃げた高台へ降りて、状況を確認した。集落はまるっきり一変していて、ひどい状態だった。堤防は3分の2がなくなり、大きくえぐれた2ヶ所から波がひたひたと田んぼだったところへ流れ込んでいた。国道には漁船が3隻乗り上がり、瓦礫となった家の残骸があちこちに散乱していた。「何もない」と、皆で集落を呆然と見渡した。波伝谷地区は70戸ほどあったが、津波から逃れた家は2軒だけだ。昭和35年の津波が来なかった地域の被害がとても大きかった。
私たちが避難した高台は小さな祠があるだけでそこにずっといることはできないので、「宮城県志津川自然の家」という宿泊施設に避難することにした。道は段差や2～3mの溝ができていたので、私を含めた4～5人が先導となり、子どもや高齢者が歩きやすいように瓦礫を片付けながら道を確保した。その間も余震があり、津波が来る恐れがあったので、高いところへの避難を繰り返しながら進んだ。約1.5kmの道のりを約3時間かけてたどり着いた。お昼前くらいに到着し、そこに研修で来ていた高校生や先に避難していた近所の人たちが迎えてくれた。「お前、大丈夫だったか！生きてたか！」と抱き合う光景がそちらこちらに見

軽トラックに積んであるナタなどの道具

られた。別の高台へ避難していた住民も集まり始め、自然の家には320名ほどの避難者がいた。そのうち、毛布、水とおにぎりを渡された。おにぎりを見た途端おなかがすいて、地震が起きてから何も食べていないことに気づき、かぶりついた。あの時のおにぎりほどおいしいものはない。
大きい川の橋が流され、土砂崩れや道路の端が削られて寸断した場所もある。どこからも車で入れる状態ではなく、自然の家は孤立状態だった。2日目、地域の顔見知りの住民がどこに避難しているかなど所在確認をしながら、避難者名簿を作成した。水洗トイレは使用できないので、グラウンドに穴を掘って臨時のトイレを作った。軽トラックに積んでいたナタなどの道具を使って、洗い場や物干し場を作った。高齢者や身体の弱い人を宿泊棟へ、若い人や身体の丈夫な人を体育館へ割り振り、皆で体育館に寝具を運んだ。さらに1～5までの区分けをし、家族が並んで布団をとれるように寝場所を確保した。携帯電話は使用できないし、電気もないのでテレビも見られなかった。夕方、自然の家まで車で逃げた人のカーラジオから被災状況の情報を得た。南三陸町、志津川の市街地は壊滅、JR気仙沼線も役場も何もない。1万1千人が行方不明ということが分かった。
3日目の朝、全体の状況を確認しなければ対策の施しようがないため、何人かと相談してベイサイド・アリーナまで歩こうと決めた。役場が対策本部を作るのはアリーナだろうと思ったからだ。自然の家の職員に急いで避難者名簿を書き写してもらい、皆から今必要なものを書いてもらった。さらに病状が悪化し救急搬送が必要な人数を確認した。5～6名はすぐに病院に行かなければならない状態だった。中には「勝手なことはしないで」と反対する人もいたが、出張中に被災し会社に連絡を取りたいという人など5～6人を引き連れて歩いていくことになった。アリーナまで行く途中は、瓦礫がすごくてどこを通ればいいか分からな

い状態だった。やっと荒町までたどり着く手前で、初めて自衛隊に出会った。オーストラリアやニュージーランドなど外国のレスキュー隊が救命活動を始めていた。アリーナ到着までに5時間かかった。役場の対策本部へ行くと、よく知る役場職員がいたので、「なんとか生きてたよ」と話しながら避難者名簿を渡した。しかしアリーナも避難者でごった返していて役場職員も大変な状況だ。行政として機能しておらず、どうしようもない状態だった。ちょうど自衛隊のヘリコプターがグラウンドへ降りたところで、緊急で病院に搬送してほしい人が自然の家にいると直接自衛隊に交渉した。アリーナから自然の家に戻る時、偶然知人と再会し「生きてたのか！ご飯食べてたの？」と聞かれ、お米を分けてもらった。私たちが自然の家に戻ると、ヘリコプターが病院へ搬送が必要な人たちを乗せて飛び立つところだった。それを見て、役目を果たせたなと感じた。

4日目の午後、海上自衛隊の帆船から大型ヘリコプターが飛んできて、おにぎり、水、毛布などの物資が運ばれた。自衛隊のヘリコプターが自然の家の広場に着陸した時には、「もう大丈夫だ」と安堵した。5日目からはアメリカ軍の援助もあり、片言の英語でガソリンや灯油をお願いした。物資は、仮設の橋ができて陸上輸送ができるようになるまで、1ヶ月近く空輸で運ばれた。4日目か5日目に報道機関が来た。最初は地元の人たちが警戒していて報道機関を入れないようにしていたが、外の人たちに自分たちの被災状況を発信するために報道機関に入ってもらった。10日目くらいからは県外からボランティアが来た。

自然の家で約20日間を過ごした。3月末に町から、近隣市町村への二次避難の話があった。避難者同士で「同じところに避難したいね」と話し合ったが、皆の希望は叶わずバラバラになってしまった。4月3日私は加美町に二次避難した。そこには宮城の人だけでなく福島の人もおり、総勢約80名が避難していた。お風呂に毎日入れる嬉しさや地域の人々の優しさが天国に感じた。家や車などすべての物が流されて何もなくなってしまったと感じていたが、津波は人と人の関係を流すことはなかったと思う。

語り部ガイドのはじまり

4月末の日曜日から朝市ネットワークの支援と人脈で、月1回の「福興市」を出した。地元の商人たちが元気にならないと町は元気にならない。5月の連休明け、ボランティア団体から町の観光ガイドサークルのボランティアメンバーに声がかかった。いろいろな人たちが町に来ているけれども、ただ歩いてもどこがどこだか分からない。以前の町がどうで、どんな暮らしをしていたのか知りたいというのだ。この呼びかけに応じたのは、12名。必要なことだと思ったし、支援を受けるだけではなく、自分たちでできることをしようと決めた。

撮影：2012.9.11　南三陸町　防災対策庁舎

5月末の福興市の日、志津川中学校で語り部ガイドがスタートした。中学校の1教室を借りて、時間を区切って自分たちの体験を語った。福興市での語り部は現在でも続いているし、ここに来る人たちの要望に合わせて旅館の1室やバスで語り部ガイドを行なっている。今では最初の12名のメンバーではまかなえないほどだ。南海トラフ地震や首都直下型地震が懸念されるようになり、西日本の消防団や行政の方が来ている。また、物見遊山で行っていいものだろうかと危惧する人が多かったが、1年経ってそろそろ行ってみてもいいのではないか、行って買物することで復興に役立てるのではないかと、だんだんと一般の方も来るようになった。

語りを聞いて涙を流す人もいる。「被災されたのにどうしてそんなに前向きに行動できるんですか」とある参加者から言われた。無くなったもののことをいつまで考えていても、戻ってくるわけではない。私たちは幸いにして生き残ったのだから、生き残った者の務めは、未来に向かって歩き出すことだろうと思っている。今、私に何ができるかを考え、できることをやっているだけだ。

後世に伝えたいこと

課題はたくさんあると思う。津波の被害を受けた建物がどんどん解体されている状況を「何かが違う」と感じた。基礎コンクリートまで除去され、更地になり、草が茂った様子を想像した時、ここがどのような場所で、何が起きたのか全く見えない場所になってしまう。津波の記憶は私たちにとって忌まわしいものであるから、それを思い出させる建物はなくなった方が良いかもしれない。

ところが、あの津波が来て堤防が全く役に立たず家が流されていく状況を見て、自然の許容する範囲でしか人間の暮らしはないのだと私たちは学んだ。明治より文化文明技術を進歩させれば、自然を人間の支配下におけると思いあがった感覚で自然と対峙していたように感じる。南海トラフ地震や首都直下型地震が懸念される今日、それらの学びをきちんと後世に伝えていくことこそ一番大切なのではないだろうか。
震災直後、あちらこちらを歩いて回り、高台踏査なども行なった。その中で、縄文遺跡が今回の津波の被害を免れて残っていることが分かった。かつてここで暮らしていたご先祖様は、津波の被害を受けることなく安全に暮らせる場所をきちんと知っていたのだ。我々は技術を持ったことで振り回されて、いつの間にか忘れてしまったことがあるのではないかと思う。日本の思想、宗教などは自然と共存するという考え方だが、西洋や中近東の考え方は神が優先して、人間が自然を支配するという考え方だ。私たちもそれを進歩だと思い込んできた。
震災を経験して、西遊記の冒頭が思い浮かんだ。自分たちはお釈迦様の手のひらで踊らされていた孫悟空だったのではないか。自然をコントロールできるなどという考えは人間のおごりだった。私たちの生命は、母なる地球環境とは別の惑星では生きられないと思う。自然と私たちの生活をどう折り合わせて、どう生きていけばいいのかが問われているのだ。
福島の原発事故で故郷を失った人々がたくさんいる。この問題が何年後まで続くのかも分からない。気づけば日本には50もの原発があるが、これからのリスクを考えるとき本当にこれでいいのかを問わなければならない。私たちは今日より明日、少しでも良い暮らしをすることを望んできた。それには多くのエネルギーが必要であった。原発を後押ししてきたのは、結局私たちの果てしない欲望なのだ。少しでも少ないエネルギーで楽しく幸せに暮らしていける社会にしていくことが大きな課題だと思っている。

震災を振り返って

幸せはGDPだけで図れるものではないと思う。生きていることの意味は、心の在り方にある。震災後、「絆」という言葉が多く使われていた。これまでの社会は人間関係が断ち切られたようだったのに、極限の状況は人々に生きているということ、人間関係など様々なことを考えさせた。皮肉にも震災が我々に気づかせたのだ。
環境保護とは自然を守ろうということではなく、私たちの暮らしを守るためなのだ。ご先祖様があって私たちがいる。そこには命のつながりがある。動物や植物も同じだ。私たちは、ご先祖様、動物、植物がこれまで地球環境を支えてくれたことに感謝しなければならないと思う。私たちの暮らしや幸せは自然の中でしか成立しない。持続する社会のために自然や文化を未来へ受け継ぐことが必要なのだ。人口の増加や経済の成長だけが良いことではない。人口が減少しても、経済が成長しなくても、その地域のいい面を見て、むしろ新たな生き方を発信していけるようになるべきだ。新たなライフスタイルや価値観の提案を、南三陸町からしていきたいし、南三陸町が全国の先進的なモデルともなり得ると考えている。
ぜひ現場に来ることで、震災を自分の体験に近いものにしてほしい。きっと学ぶことが多くあるだろう。

個人　地名に込められた先人からのメッセージ。

大崎市

太宰 幸子 宮城県地名研究会

取材日 2012.09.20

日本地名研究所会員、宮城県地名研究会会長、東北アイヌ語地名研究会会長。 2005年～2008年　河北新報社「地名の泉」土曜日執筆担当し、2012年TBS系列（JNN）サンデーモーニング「風を読む」地名と歴史などに出演。主な著作『みやぎ地名の旅』、『災害・崩壊地名～地名にこめた祖からの伝言』、『地名は知っていた　津波被災地を歩く＜上＞・＜下＞巻』他多数。

3月11日　14時46分

息子が住んでいる美里町桜木にいた。揺れが大きく家屋からいつでも逃げることができるようにまず玄関や窓を開けた。揺れ始めてからずっと時計を見ていたが強弱はあったものの20分以上揺れ